

# 映画研究から メディア研究へ

## テレビ、ミュージックビデオ、アニメの研究の可能性

### ミュージックビデオの研究？

「映画やメディアの研究をしています。ミュージックビデオについても論文を書いています。」このように言うと、驚かれて「ミュージックビデオでどのような研究をしているのですか」と尋ねられることがあります。すこし遠回りになりますが、映画研究を経由して、この質問に答えたいと思います。

### 映画研究と小津安二郎

わたしは映画にかんして、小津安二郎の研究をしてきました。小津は溝口健二や黒澤明とともに、日本映画の三大巨匠に数えられる監督です。『晩春』（1949年）や『東京物語』（1953年）といった、家族の物語が主題となっている戦後作品が有名です。多くの作品で、結婚のために家族と離れなければならない20代の女性の葛藤が中心に据えられます。しかし、映画といってわたしたちが思い浮かべるような、恋のライバル登場による感情の揺れ動きや迫力ある危機一髪の活劇といった大事件は描かれません。小津はあくまでたんたん和家人をめぐる物語を捉えるのみです。こうした控えめで繊細な小津の表現は海外からの評価も高く、しばしば日本的な「わび・さび」の美学にたとえられてきました。

小津は自身の独特な映画スタイルによっても有名です。後期作品で

は、カメラ移動やディゾルヴはほとんど使用されません。カメラは極端に低い位置に据えられます。構図も厳格に定められ、フレームに収められる俳優のアクションが図柄上一致するように捉えられます。編集のうえでも、ふたりの登場人物が会話する場面で使用される「切り返し」の技法において、映画の基本文法と言われる「180度のルール」が守られません。こうした独特なスタイルが小津映画を唯一無二の芸術の域に高めたといえるでしょう。

映画研究者たちは、芸術にまで高められた小津映画の秘密、あるいは小津映画の独特なスタイルの意味を探求してきました。わたしも同じく小津映画の秘密を探っていますが、円熟期といえる戦後の有名作品以上に、1920年代から1930年代前半にかけての初期作品に注目しています。小津は20代や30代のころ、後年の静かな作品とは程遠いハリウッド映画の強い影響下で作品を作りました。小津は自身が憧れるハリウッド映画を模倣することから、独特な映画スタイルを發展させたのです。小津はどのように自身の映画スタイルを練り上げたのか、これは大変興味深い問いです。ただしここでは、1920年代後半にハリウッド映画がメディアとして持っていた意味を強調したいと思います。第一次世界大戦後、アメリカは急速に都市文化を發展させ、ハリウッド映画はこうした新しい生活を描き、また映画は日常的娯楽として、都市文化の中心にあったのです。そして、こうした新しい自由な文化はまさに映画を通じて、日本に伝えられ、小津はこの新しい感覚を享受することから映画監督としてのキャリアを始めたのです。

### メディア研究の可能性

1920年代、映画は新しい感覚を伝えるメディアの中心にありました。人々は映画の伝える感覚に惹かれ、映画館に通いました。映画は、自由、スピード、スリルなどの感覚で充滿した環境のようなものだったのです。このようにメディアを一種の環境として捉えることに、メディア研究の可能性があると考えています。

小津が映画を撮りはじめたころから、100年ほど経ちました。その間、テレビの出現からコンピューターとインターネットの普及まで、わたしたちを取り巻くメディアは大きく変化しました。こうしたメディアはわたしたちに、いかなる感覚を与えているのでしょうか。こうしたメディアはわたしたちの生きる環境として、いかなる可能性を開いたのでしょうか。このように問いながら、テレビ、ミュージックビデオ、アニメ（さらに言えば、ビデオゲームやインターネット上の動画）といったメディアを考えたいと思っています。

冒頭の問いに戻れば、ミュージックビデオは短い時間（ほとんどが数分間）しか持たない作品の長さのなかで、物語と視覚イメージの新しい形式を發展させてきました。さらに今日では、視聴と撮影が可能なスマートフォンの普及により、ミュージックビデオはわたしたちに新しい感覚を与えるメディアとして機能しているように思われます。ここから、いかなる文化や生活が生まれてくるかという問いは、わたしたちにとって重要な問題なのです。



滝浪 佑紀

TAKINAMI Yuki

立教大学現代心理学部映像身体学科 准教授  
映画メディア論 映像身体論

これまでの企画記事はコチラ>>

